

◆吉備池廃寺の調査—第105次

1 調査の経緯と概要

これまでの3カ年に亘る調査により、吉備池廃寺は東に金堂、西に塔を配し、巨大な規模を有する「百済大寺」の可能性が極めて高いものと考えられるに至った。第81-14次調査では、金堂は東西約37m、南北約28mの掘込地業の上に高さ2m以上の基壇を築いたものであることが判明した。第89次調査では、塔は旧地表面上に1辺約30m、高さ2mを大きく超える方形の基壇を築いたもので、飛鳥時代の主要な寺院の塔基壇と比較して4倍近くの面積を有することが判明した。いずれも当時の最大

級の規模を誇るものである。第89・95次調査では、塔基壇の南方約30mの位置に幅約6mの南面回廊を検出、さらに塔基壇の西方約26mに南面回廊と同規模の西面回廊が見つかり、寺地はさらにその外方へ少なくとも22m以上広がることが確認され、また、金堂と塔の中央南方には門が存在しないことが明らかとなった。このように、吉備池廃寺は広大な規模の伽藍をもつこと、塔はその基壇の規模から考えて我が国では大官大寺と百済大寺の2寺にしか例のない九重塔の可能性が考えられること、出土した軒瓦は西暦643年に金堂から創建された山田寺所用瓦の祖型にあたり、それよりわずかに先行する640年頃の

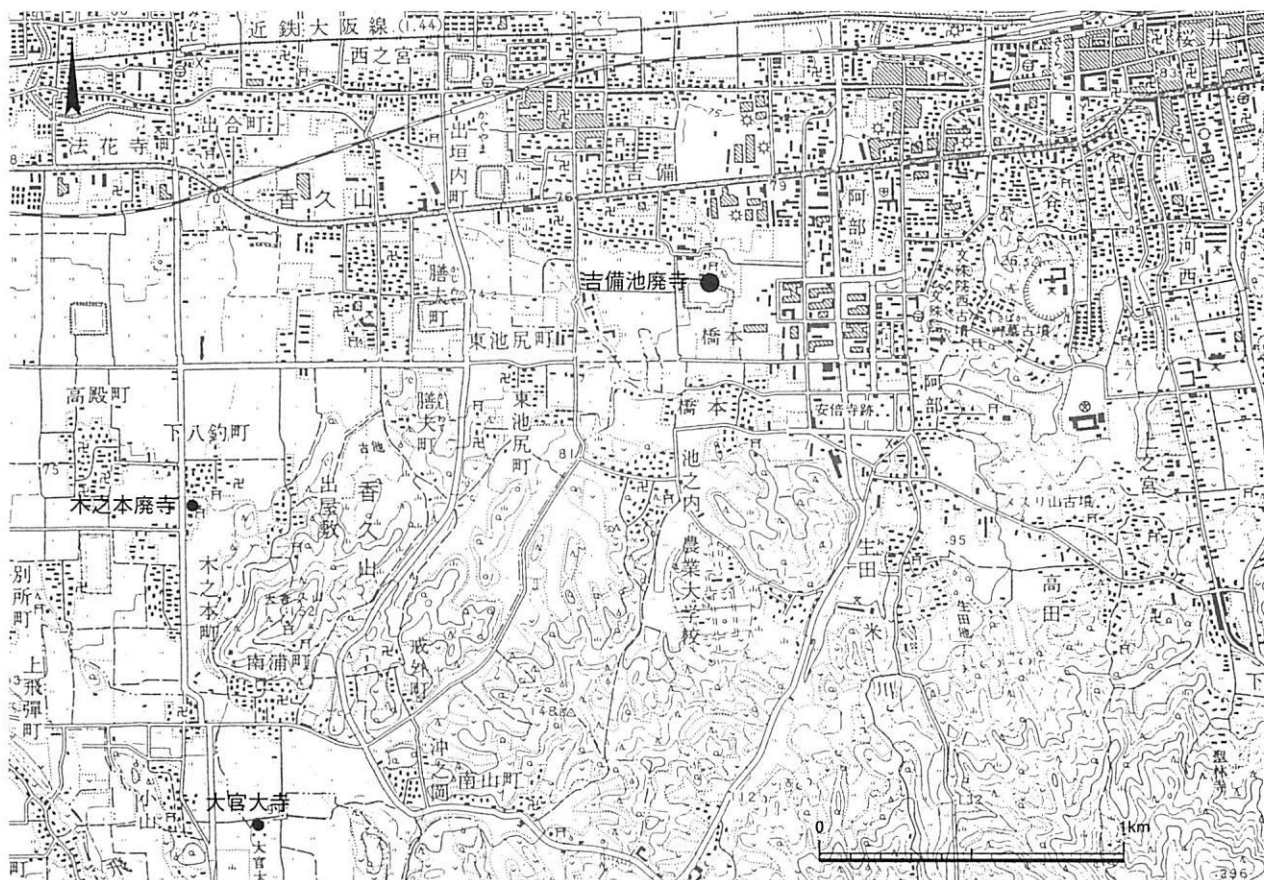


図55 吉備池廃寺位置図 1:25000

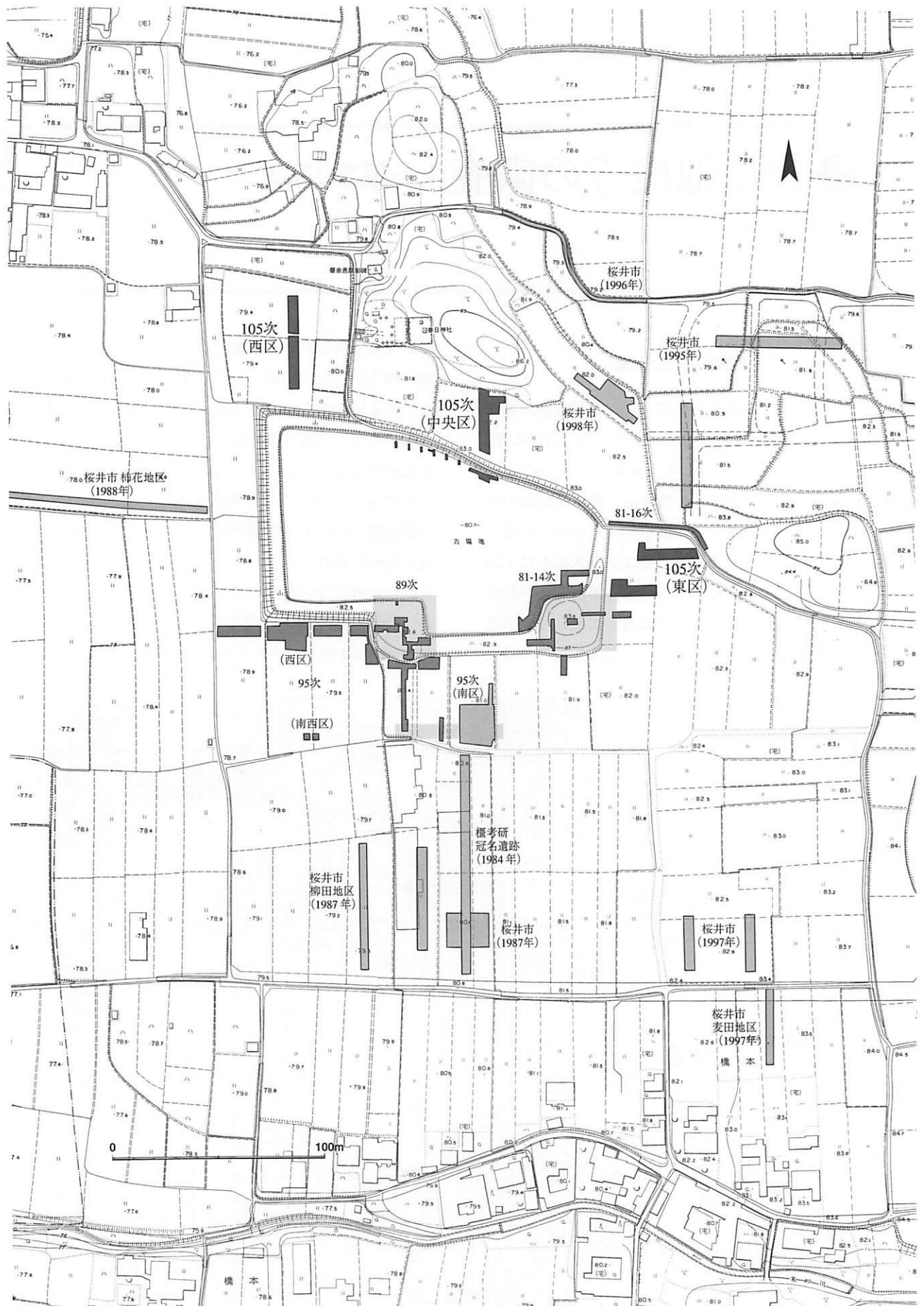


図56 第105次調査位置図 1:2500

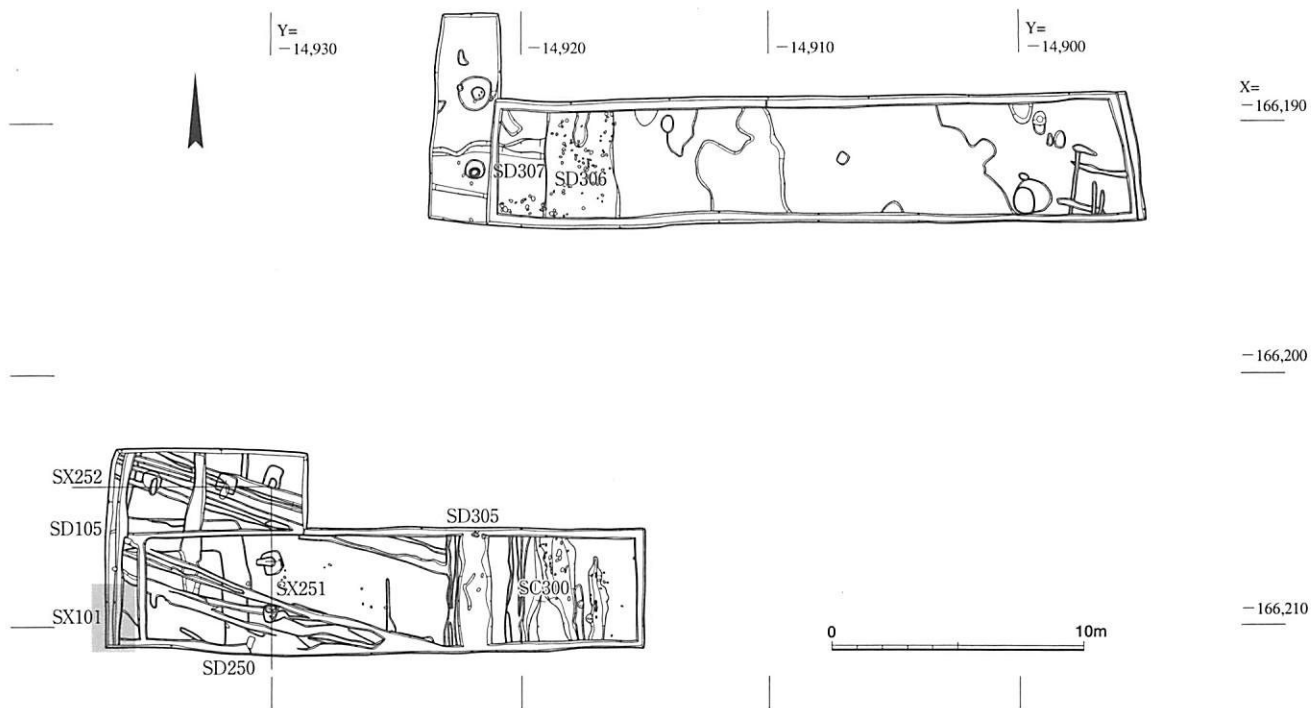


図57 第105次調査東区遺構図 1:300

年代が与えられること、また、瓦の出土量が少なく補修用の瓦が認められないうえに完形品が一例もないことから、短期間の内に他へ移建された蓋然性が高いことが判明した。これらのことから、吉備池廃寺は、一豪族の氏寺などではなく、天皇家に関わり、国家的象徴としてその威容を誇っていた寺院とみるべきであることが、調査の進展と共に、より現実性を増してきた。史料の上でこれに相応しい寺院を求めるとすれば、『日本書紀』および『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』が舒明天皇11年(639)発願と伝え、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』では天武2年(673)に高市の地に移建され高市大寺となった、日本最初の勅願寺である百濟大寺である蓋然性が極めて高いといえる。

今回の第105次調査の目的は、東面回廊の位置を定め東西の回廊の規模を確定すること、僧房など寺の北側に位置する施設の確認、および西北部への寺地の広がり把握することであった。調査は1月7日から開始し、4月10日に終了した。調査面積は計738m²である。

2 検出遺構

調査は大きく3地区に分けて実施した。東面回廊部分では2本の東西トレンチを金堂の東北方に設定して東区とした。寺の北部では金堂と塔の中軸上に位置する南北トレンチと、池の中に7カ所の小規模なトレンチを設定して中央区とした。また、池の西北隅に近い水田及び宅地に南北トレンチを設け西区とした。東区北トレンチは東西約28m、南トレンチは東西約22m、中央区では北トレンチは南北約32m、池内の第1トレンチは東西約15m

あり、その西方に5m間隔で南北2m程度の小トレンチ5本を設定し、西区では北トレンチが南北約18m、南トレンチが南北約25mである。以下、それぞれの調査区ごとに、検出した遺構を説明する。

東区

南トレンチの基本的な層序は上から、①旧耕作土・床土(厚さ0.7~1m)、②灰色粘土層(厚さ0.1~0.2m)、③赤褐色に酸化した鉄分の沈着が顕著な灰褐色~褐色粘質土層(厚さ0.1~0.2m)、④橙黄色粘質土混灰褐~黄灰色粘質土層(厚さ0.2m前後)、⑤有機物を伴う砂混灰黒色粘質土層(厚さ0.2m以上)、⑥灰黒色シルト~砂層(厚さ0.1m以上)となっている。②層は東区全体に広がる土層で、第81~14次調査でも確認されている。④層は吉備池廃寺創建に伴う整地層で、後述するように土師器杯H・高杯C、須恵器杯H蓋・杯H身等が出土した。⑤層以下は土器細片を含み低湿地に堆積した物を主体とする層で、廃寺創建時の基盤をなす。地山面は確認していない。北トレンチでは、③層までは概ね南トレンチと共通するが、③層の下層は基本的に橙黄色粘質土~シルトの地山となっており、基本的に④整地層は認められず、南トレンチとは様相を異にする。南トレンチでは奈良時代末~平安時代初め以降の遺構を③層上面で検出し、飛鳥時代の遺構を④層上面で検出したが、北トレンチでは飛鳥時代の遺構は認められなかった。

南トレンチでは、飛鳥時代の遺構として、東面回廊西雨落溝の石組抜取溝、金堂基壇北東隅掘込地業、掘込地業の外を巡る周溝、2条の柱列がある。

石組抜取溝SD305 金堂基壇掘込地業の東約13mに位

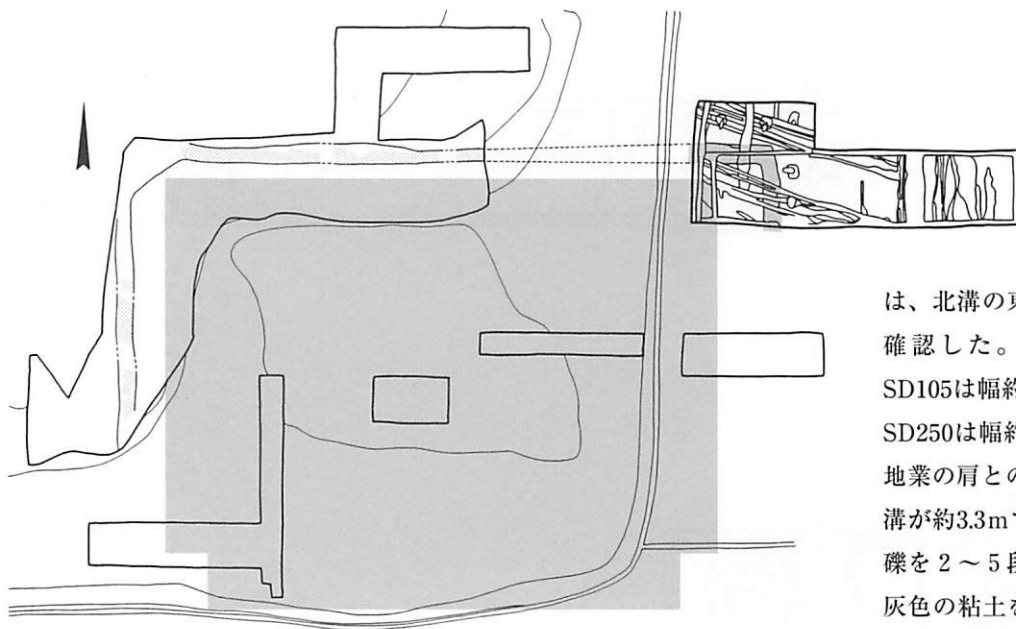


図58 金堂基壇掘込地業と外周を巡る溝 1:500

置する。幅約1.3m、深さ0.2mの南北素掘溝で、わずかに2石が抜き取られないまま底部に残っていた。礫は20cm大で、1石は平らな面を上に向ける。石組抜取後の溝は黄色ないし黄灰色の地山土混じり粘質土で一気に埋め立てられ、その際に投棄された瓦や土器が含まれる。南面回廊北雨落溝石組の抜取素掘溝は、幅1.5m、深さ0.2mありSD305とほぼ同じ規模を有することから、SD305はこれに連なる西雨落溝石組を抜取ったものと考えられる。

東面回廊東雨落溝については、西・南面回廊の調査所見からSD305の東方約6mの位置に想定できるが、今回の調査区では確認できなかった。既に削平されているのかもしれない。また、北トレンチ内では、西および東雨落溝とも見つかっていないが、地形的に北が高くなっていること、南面回廊雨落溝では延長距離17mに対して22cmの高低差があったことからすると、北トレンチの位置では溝は既に削平されている可能性が高い。

東面回廊SC300 SD305以外の回廊に関わる遺構については、残存状況が悪いため基壇土や基壇縁石、基壇造営に伴う足場穴などは、検出できなかった。東雨落溝についてはなお検証の必要があるが、SD305の東約6mの位置に想定した場合、東・西面回廊間の距離は心々で約158m、外側の雨落溝まで含めると約164mとなる。また、第95次調査では少なくとも西面回廊の西約22mまでは寺地に含まれるとされているので、寺地の東西幅は180mを超えることとなる。

金堂基壇掘込地業SX101 第81-14次調査の成果から予想された位置にほぼ正しく検出された。

周溝SD105・250 金堂基壇掘込地業に並行して巡る溝。第81-14次調査で北および西溝を検出しており、今回

は、北溝の東延長部と東溝の北半部を確認した。検出面において、北溝SD105は幅約1.3m、深さ約1.1m、東溝SD250は幅約1.1m、深さ約1m、掘込地業の肩との間隔は北溝が約1.5m、東溝が約3.3mである。底部には人頭大の礫を2～5段ほど雑然と積み上げ、黄灰色の粘土を含む灰色～暗灰色の粘質土ないし砂質土で埋め立てている。第81-14次調査では、近世の攪乱により

時期を明確にできなかったが、今調査では、③層の下層にあること、④層中にも認められる黄色地山土を含む粘質土により溝が埋められていること、埋土中には奈良時代以降の遺物が全く含まれていないことなどから、寺院造営に伴う溝とみて誤りない。SD105西端部の底面高が東端部より約0.4m低くなっていること、また周辺はもともと湿潤な土地であることから、この溝は基壇掘込地業造営時の排水を目的として掘削され、埋め立て後も排水暗渠として機能した可能性が高い。

柱列SX251・252 周溝に並行して外側をL字形に巡る柱穴5基を検出した。溝心からは東柱列SX251が約1.5m、北柱列SX252が約2.1mあり、柱間は1.8～3mと不揃いである。埋土は黄色地山土を含む粘質土で、遺物はほとんど認められないが、SX251南端の柱穴掘形埋土には拳大の礫や平瓦小片が含まれる。性格は不詳。

溝SD306・307 吉備池廃寺廃絶後、東面回廊の位置に平安時代から中世にかけての南北溝SD306とSD306から西へ分岐する東西溝SD307(北トレンチ内)が流れ、回廊基壇などは削平を受ける。幅1.8～2m、深さ約0.2mあり、埋土中には多数の礫と共に吉備池廃寺創建瓦や土器などの遺物が比較的多く含まれる。出土土器から、12世紀頃には埋まったものと考えられる。

このほか、第81-14次調査では金堂周囲の砂利敷きが検出されているが、今調査区では残りが悪く広く敷き詰められた状況は認められず、拳大以下の礫の疎らな散布により砂利敷きの一端が窺えたに過ぎない。

中央区北トレンチ

基本的な層序は、①耕土・床土層(厚さ約0.4m)、②灰褐～暗灰褐色土層(厚さ約0.2m)が全面に認められ、調

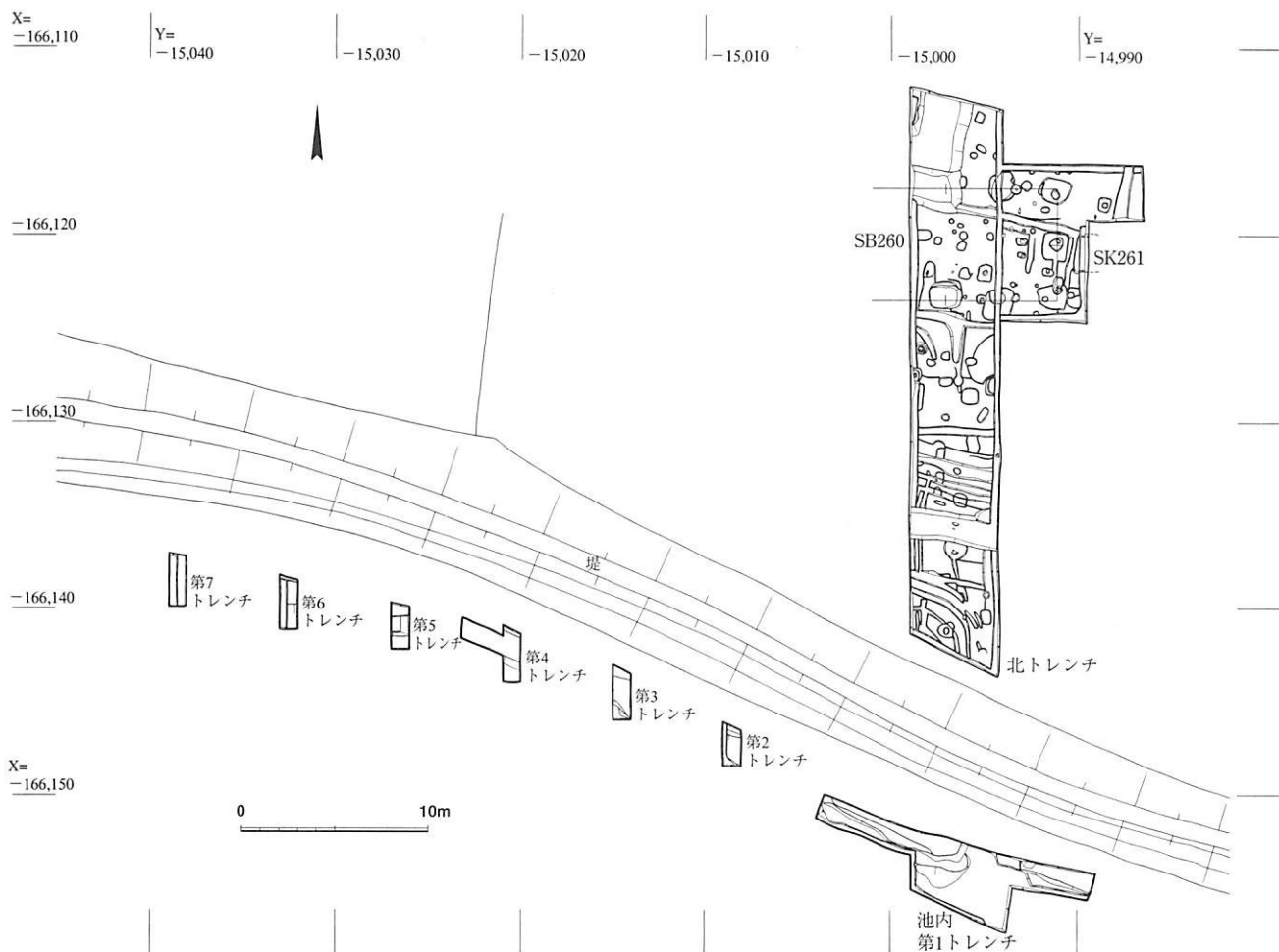


図59 第105次調査中央区遺構図 1:400

査区南3分の1では③橙色粘質土混灰褐色砂質土層(厚さ約0.3m、瓦器を含む)、④暗灰褐色砂質土層(厚さ約0.5m、瓦器を含む)と続き、風化礫を含む橙黄色砂質土～シルト層の地山に至る。調査区中央部では、②・④層の下層として⑤暗灰色土層(厚さ約0.25m、瓦器を含む)、⑥暗橙黄色混灰色砂質土層(厚さ約0.15m、藤原宮期～奈良時代前半・奈良時代末～平安時代初めの土器等を含む)があり、地山へと続く。また、調査区北部では②層の下に⑤'暗橙色粘質土層(厚さ約0.2m)、⑥'橙黄～暗黄灰色砂質土層(厚さ約0.1m)が堆積し、地山へと続く。②層下面で中世の大溝などを、⑥および⑥'層上面で奈良～平安時代の柱穴・小溝などを、地山面上で飛鳥時代の掘立柱建物などを検出した。

掘立柱建物SB260 背後の丘陵南縁を削平して造成した平坦面に建てられた東西棟建物。東西規模は西妻が調査区外のため不明であるが、桁行3間以上、梁間2間、柱間は桁行・梁間ともに約3m、柱穴の掘形は一辺1.5m前後の隅丸方形で、深さは1m前後。北側柱のうち東から2間目の柱穴は中世の大溝により大きく破壊される。間仕切りあるいは廂は認められなかった。柱穴掘形、柱抜取穴とも埋土中にはほとんど遺物を含まない。

SB260は塔と金堂の東西中軸北部に位置し、この建物

と桜井市教育委員会が1999年に調査した大型掘立柱建物(SH-1001)とは、東妻間で62.5mの距離をおくが北側柱筋を揃えており、両者は密接に関連する同時期の建物と考えることができる。SH-1001は、出土土器からみて7世紀中頃から後半にかけて使用されていたとされ、SB260からは時期を限定できる遺物は得られていないが、検出した層位からはその頃のものと考えて矛盾はない。

SB260は、前述のように間仕切りあるいは廂が認められないが、金堂や塔などの伽藍との位置関係やSH-1001との関連性からみて、大房や小子房などの寺院に付属する僧房の施設と見なせる。SH-1001を僧房の施設とみることについては、桜井市教育委員会により既に指摘されているが、SB260の発見はその考えをさらに補強することとなる。この発見により寺地の南北幅については、SB260北側柱と南面回廊南雨落溝との間の距離から、少なくとも約160m以上あることが判明した。

土坑SK261 地山上面で検出。僅かに西辺部分を検出したに過ぎず、大部分が調査区外にある。直径2m以上、深さ約0.3m、橙黄灰色砂質土の埋土から飛鳥Iの土師器杯C I・C II、鉢が出土した。層位と出土遺物からみて、吉備池廃寺創建期に関わる土坑と考えられる。

なお、中央区北トレンチ北半部からは後述するように

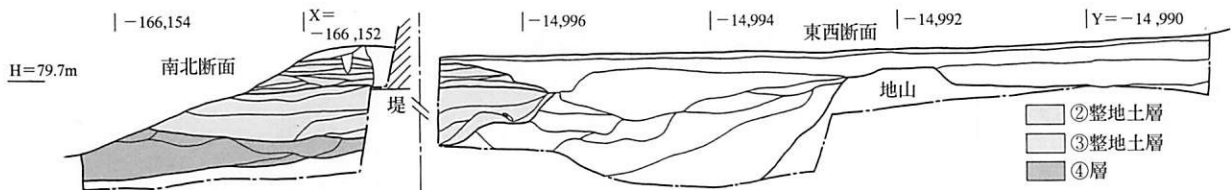


図60 第105次調査中央区池内第1トレンチ土層断面図 1:80

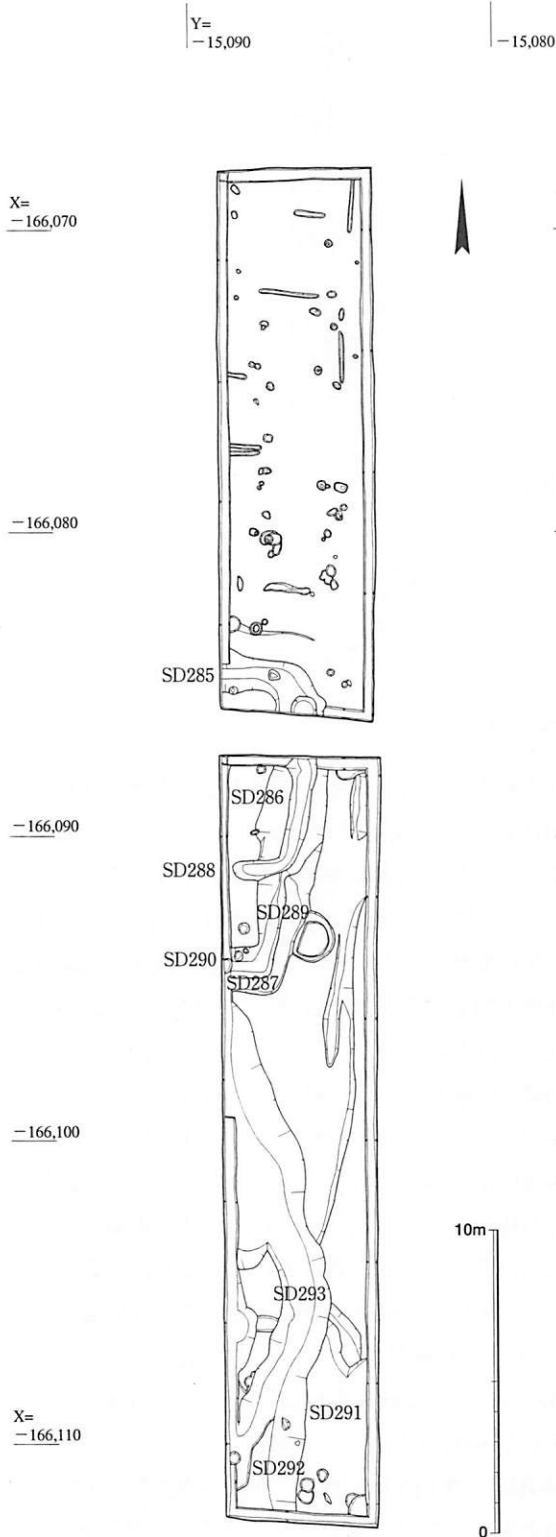


図61 第105次調査西区遺構図 1:250

平安時代の軒平瓦1点、軒丸瓦2点、丸・平瓦計3.5kgが出土しており、吉備池廃寺廃絶後、平安時代になってからも付近に小規模な御堂の如き瓦葺きの堂宇が存在していたことが窺える。

中央区池内トレンチ

この調査区では北面回廊あるいは講堂の発見には至らなかったが、古墳時代以前から飛鳥時代にかけての流路ないし低湿地を埋め立てたと考えられる7世紀中頃の整地層を確認した。基本的な層序は、①現代の砂・ヘドロ層、②整地土層（時期不詳、赤褐色砂質土と暗灰～黄灰色砂質土の互層）、③灰色～黒灰色粘質土層（吉備池廃寺創建に関わる整地土層）、④灰黒色粘質土・砂質土・砂礫層（古墳時代以前の包含層）、⑤地山崩落土層（黄灰色粘質土・橙黄色粘質土などの山土からなる）、⑥地山（橙黄色砂質土～シルト）となっている。

②層は第1トレンチ中央部から西方の第6トレンチまで認められ、第7トレンチでも現代の堤改修に伴う攪乱を受けて埋め戻された状況を窺うことができ、少なくともこのトレンチまで延びていたといえるが、池底表面の観察からはさらに西方へも延びるものと予想され、金堂と塔間の中軸から西へ40m以上、南北幅15m以上に広がる。このような状況からみて②層は、仮に吉備池廃寺に関わるものであったとしても講堂や回廊基壇土の一部とは考えがたい。

地山上面は第1トレンチ北辺付近で標高79.7m前後あり、北トレンチ南端部より約50cm低い、ここからさらに落ち込み、そこに④・⑤層が堆積しており、これより南は古墳時代の終わりから飛鳥時代にかけての頃まで流路あるいは低湿地であったと考えられる。③層の下層には一部に黄白色粘土と青灰色砂の互層からなる水成堆積層が認められ、流路ないし低湿地であったところを③層で埋め立てたとみられ、③層からは埴輪小片とともに土師器高杯（飛鳥I）が出土しており、吉備池廃寺創建に伴う整地の一端を窺うことができる。

西区

北トレンチでは、基本的に耕土・床土（厚さ約0.3m）の下層が地山（橙褐色土）で、遺構は地山上面で検出した。南トレンチの基本的な層序は、①造成土および旧耕土・床土層（約0.4m厚）、②暗青灰褐色土（約0.2m厚）、③灰

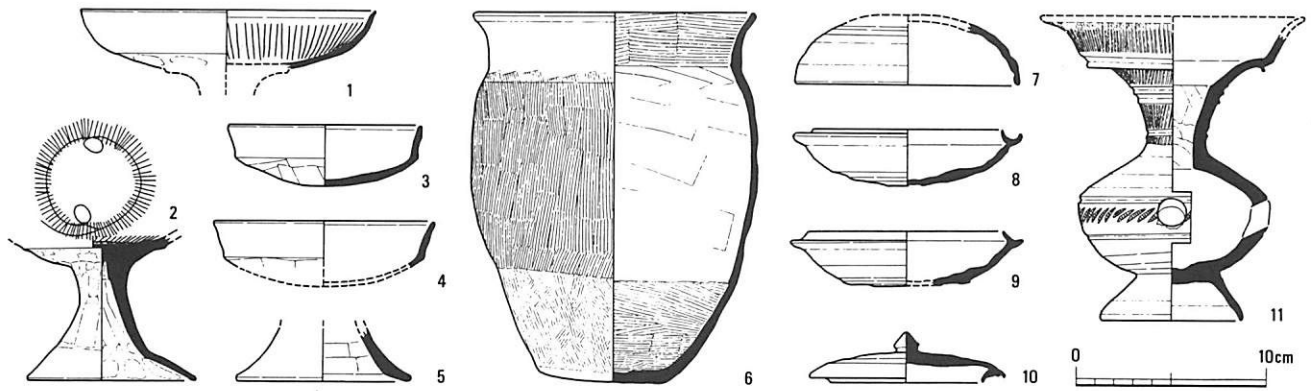


図62 東区整地土層出土土器 1:4

黄～橙黄褐色粘質土(約0.3m厚)、④地山(橙黄褐色粘質土～シルト)で、③層ないし④層上面で遺構を検出した。西区では明確な7世紀代の遺構は認められず、全て奈良時代末以降のもので、北トレンチでは中世以降のものしか認められなかった。

溝SD285～287 幅1～1.5m、深さ約0.3mのコ字形に巡る溝で、北トレンチ南端から南トレンチ北半部において東溝と北・南溝の一部を検出。埋土に14世紀以降の遺物を含む。

溝SD288～290 幅0.6～0.8m、深さ0.4m以上のL字状の溝。SD289・290は調査区の西に延びる。これらの溝が埋没した後、ほぼ同じ位置でSD286・287が掘削されている。14世紀以降。

流路SD291～293 南トレンチ南東隅から北西に向かう流路。出土土器類からみてSD291が12～13世紀、

SD292が平安時代前期、SD293が奈良時代末から平安時代初頭。流路内からは吉備池廃寺創建期の軒瓦3点、丸・平瓦90kgあまりが出土している。(小池伸彦)

3 出土遺物

土器・瓦類を主としてほかに土製品、金属製品、骨類、種子・種皮類などがある。

土器類 本調査区の各遺構や遺物包含層からは、弥生時代から近・現代にいたる土器類や古墳時代の埴輪が出土した。このうち東区の整地土層(④層)からは、次に掲げる土器が出土した(図62)。土師器の器種には、杯C、杯G、杯H(3・4)、高杯C(1・2)、高杯H(5)、甕(6)等が、須恵器の器種には、杯H蓋(7)、杯H身(8・9)、杯G蓋(10)、高台付壺(11)、甕等がある。なお、3・6・9・10は、口縁端部が1/6以上残存した個体

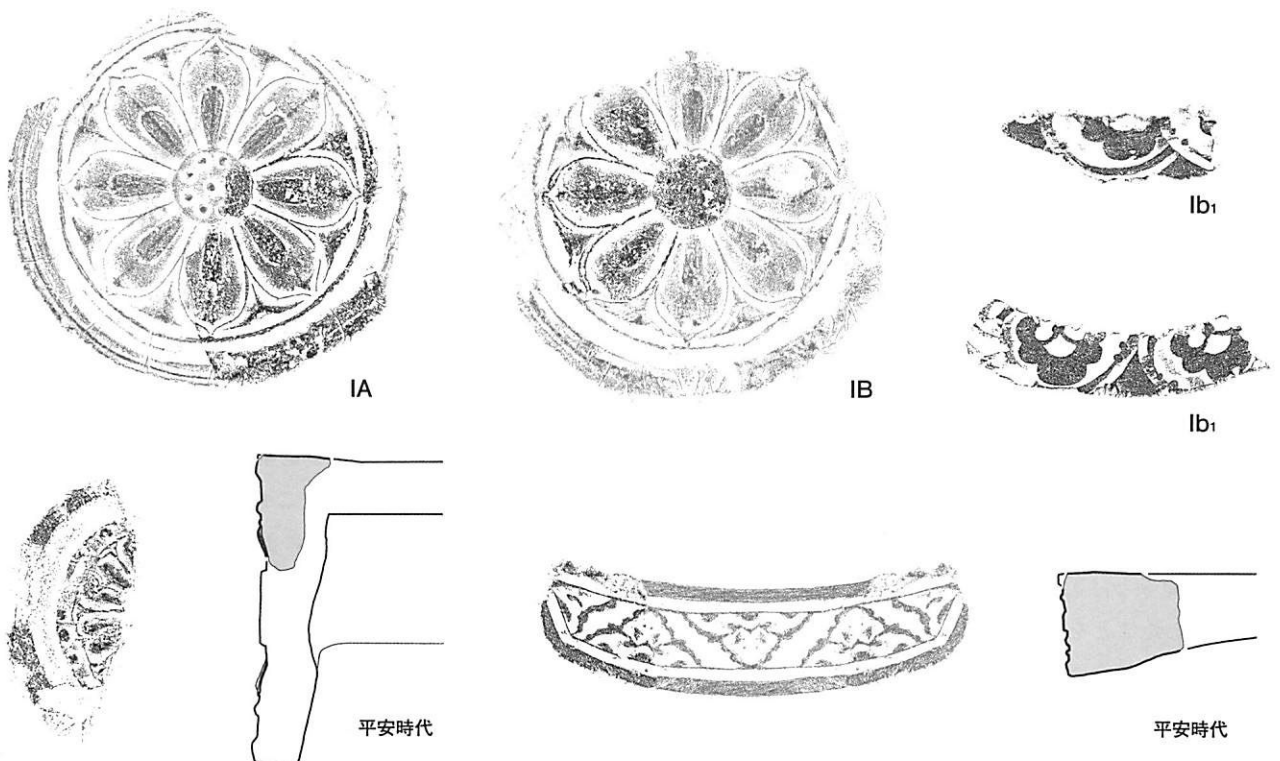


図63 第105次調査出土軒丸・軒平瓦 1:4 左下の軒丸瓦のみ第89次調査出土

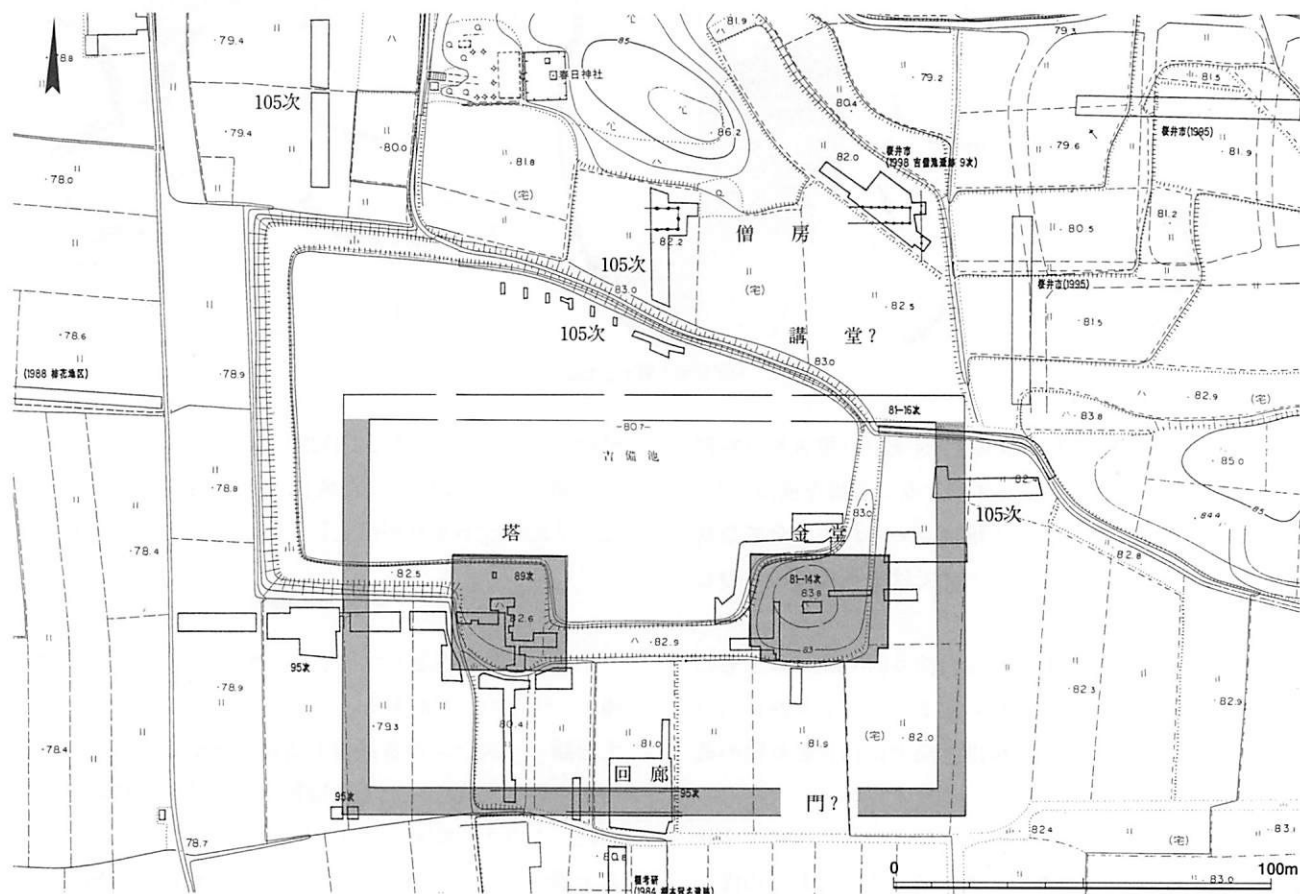


図64 吉備池廃寺の推定伽藍配置 1:2000

である。また、7・10の頂部は回転ヘラケズリ調整、8・9の底部はヘラ切りで終わっている。これらの土器群は、山田寺第7次調査下層SD619・整地土（『藤原概報20』）、藤原宮第75-2次調査SX037（『藤原概報25』）の出土土器に近似した内容をもっている。（深澤芳樹）

瓦埴類 軒丸瓦34点、軒平瓦5点、丸瓦1,062点（182.3kg）、平瓦5,212点（603.9kg）が出土した。いずれも、東区および中央区からの出土品が大半を占める。

軒瓦（図63）は、吉備池廃寺の創建瓦である軒丸瓦Ⅰ型式が31点（ⅠA13点、ⅠB9点、種別不明9点）、同じく軒平瓦Ⅰb₁が4点と圧倒的に多いが、ほかに平安時代の軒丸瓦3点と軒平瓦1点がある。後者は、すべて中央区北トレンチからの出土。このうち軒丸瓦は、第89次調査で塔基壇の西方から出土したもの（図63の左下）と同範で、瓦当裏面に粗い布目を残す一本作りである。今回はじめて、組み合う軒平瓦が明らかとなった。早く廃絶した吉備池廃寺とは別に、近辺に、この時代の小規模な堂宇が存在したことをうかがわせる。

なお、創建軒平瓦Ⅰb₁のうち1点は、瓦当面から約5cmの距離に、直径1.5cmほどの孔を焼成前にあけている。形状的には通常の釘孔に類似するが、茅負の外側となる部分にあたるので、用途不明。（小澤 毅）

4 まとめ

今回の調査では、①伽藍の規模について、東面回廊西雨落溝の位置から、東・西面回廊の東西幅が心々で約158m、寺地の東西幅は180mを超えると判明し、僧房の位置から南北幅は160m以上の規模を有すること、②金堂基壇造営については、基壇の掘込地業の外周にも溝を巡らせて排水に完璧を期そうとしたことがうかがえ、③寺院創建に伴う整地が、少なくとも中央区や東区において広く実施されている状況、④廃絶後、南北溝が東面回廊の位置を踏襲して南流していることなどが判明した。

これまで未解明の主要な伽藍は、中門、北面回廊、講堂などである。中門については塔・金堂の中間にないことが既に判明し、塔の南でも確認されていない。今回の調査結果からは講堂も塔と金堂間の中軸上に位置する可能性は低い。このように、これまでの調査結果からは、中門と講堂はそれぞれ金堂の前方および後方に位置する可能性があるといえる。また、北面回廊も今回の中央区における調査では確認できず、池内トレンチ以南に位置する可能性が高い。こうした点をふまえて、今後は金堂の南方および北方において調査を進め、これら主要伽藍を確認する必要がある。

（小池伸彦）